

上海駐在武官府

父は昭和 18 年 2 月、軍属として上海駐在武官府海軍特務機関に着任した。当時の上海は、多くの亡命ロシア人やナチスの迫害を逃れたユダヤ人難民が居住し、中国人秘密結社の「青幫」が暗黒街を支配していた。まさに国際色豊かな人種の坩堝となっていた。各国は租界地(居留地)をつくり、そこに自国民を住まわせ、軍隊が安全を確保していた。租界地としては、イギリス・アメリカの共同租界及びフランス租界が挙げられる。明治時代から多くの日本人が共同租界内の虹口地区に移住し、日本人街(通称・日本租界)をつくり約 10 万人が住んでいた。日本租界の行政権は、昭和 18 年に日本から汪兆銘政権へ返還された。その後、昭和 20 年 8 月の日本の敗戦に伴い、蒋介石の国民党政府によって上海全域が接收された。

当時、海軍特別陸戦隊本部と上海駐在武官府は虹口にあり、密接に連携していた。同武官府は、一時的に「ピアスアパート(浦西公寓)」に置かれていたという記録が残されている。同アパートは昭和 6 年に竣工した外国人向けマンションで、日本人の居住者も多かったようである。武官府は昭和 12 年以降、ここへ移転し、終戦まで使用した。

満州で生産された物資は、南満州鉄道によって大連港まで運ばれ、そこから海路で上海へ輸送され、港湾部の倉庫群に保管されていた。虹口には司令部や特務機関、それらを支える軍専用・徴用倉庫が網の目のように集中しており、日本にとって軍事物資や戦略物資の調達・輸送の中枢となっていたと云える。

父は、10 万坪(東京ドーム約 7 個分)の広さを有する巨大倉庫「第 7 海軍倉庫」を管理していた。日本軍は上海にあった民間の広大な倉庫や埠頭、工場などを接收し、数多くの倉庫に番号をつけて管理していた。終戦後、上海の海軍の資産・施設は、アメリカ軍や国民党軍により接收された。日本軍から連合国側へ引き渡された倉庫群の記録の「支那方面艦隊引渡目録」(防衛省防衛研究所、レファレンスコード C08010811200)の中の、「招商局碼頭之部」及び「興和祥碼頭之部」に「七号倉庫」の名が確認できる。また、同目録で「上海倉庫信託園路碼頭倉庫」の名が確認できる。一帯が巨大埠頭の倉庫群だったのである。「第 7 海軍倉庫」

の敷地面積(10 万坪)は、現在の国内最大級の物流施設「GLP ALFALINK 相模原」(神奈川県相模原市)とほぼ同規模である。コンピュータのない時代に、この巨大倉庫の膨大な資材をいかに管理していたのかは、注目すべき点である。

アルバムから、昭和 18 年 11 月に撮影された写真を見つけた。まさに同年 11 月 5 日～6 日に、アジア各国(日本、中華民国、満州、フィリピン、ビルマ、タイ、インド)の首脳が集まった「大東亜会議」が東京で開催された。この写真のスーツ姿の青年は、この会議のために上海から東京へ一時的に呼び戻されていたのではないだろうか。

父は昭和 21 年 5 月に博多に引き上げた。激動の上海で、現場レベルでの直接的なやり取りや調整に携わっていた可能性がある。そうした職務を通じて、国家の表と裏を間近に目撃していたのかもしれない。引揚げ後は地方公務員として勤務したが、上海時代の経験について周囲に語ることはなかった。

(川端紅葉著 2026・8・27)



©川端紅葉